

〔下學集下財〕燈籠トウロウ

〔和爾雅五器用〕燈爐トウロウ燭籠トウロウ燈籠トウロウ燈籠トウロウ石燈イシドウロウ

〔倭訓栞前編十八〕とうろう 唐式に燈籠と書り、略 明月記に、近時民家今夜立長竿、其末稍斥如

燈樓物、張紙舉燈遠近有之、と見えれば、寛喜の比までは、官家に用ゐざりしなるべし、略 中本朝

式に燈樓に作るは掛る物と見ゆ、反燈樓綱といふ事、雲圖抄諸節會に見ゆ、侍中群要同じ、涅槃經

に燈爐あり、三才圖會に燈架あり、

〔和漢三才圖會三十二〕燈籠トウロウ

按、三才圖會所圖者形似南瓜、俗呼曰阿古太、近世以大提燈爲常用、甚捷器也、

〔續修東大寺正倉院文書後集四十三〕造石山院所解

燈爐二基 各長四尺 徑一尺五寸 工二人 略 中

以前、起天平寶字五年十二月十四日、盡六年八月五日、請用雜物并作物及散役等如件、以解

天平寶字六年閏十二月廿九日案主下 別當主典安都宿禰

〔延喜式三十六〕新嘗會供奉料 中宮准之

燈樓六具 各加案 紗四丈八尺 略 中

右新嘗會料依前件 略 中

供奉年料 中宮准此

燈樓料紗二疋二丈四尺 春秋各一疋一丈二尺 略 中

右起十一月一日迄來年十月卅日料 略 中

燈樓九具、盤形燈臺三基、並隨損請替、

〔續修東大寺正倉院文書後集四十三〕造石山院所解

燈籠製作